

E・A・ポウの『約束ごと』の世界

—その黙示的性格—

前 田 礼 子

I

ポウの耽美的な作品の中でも、とりわけ耽美的なロマンスである『約束ごと』（‘The Assignment’）をとりあげて、ポウの意味するこの作品における楽園の概念について考えてみたいと思う。この作品は、わが国ではもちろんのこと、あまり重要視されている作品ではない。しかしこの作品は、楽園とは、また至福とは、ということについて、きわめて熱烈な願望をもって書かれた作品である。美のための美とか、あるいはロマンス至上主義という言葉が、これほど適切にもちいられることのできる作品は、ポウの作品中でも、詩をのぞけば、少ないといえる。

『約束ごと』は、死を越えた彼岸の世界で成就される恋をえがいている。卑近な表現をすれば、いわゆる心中を遂げることによって完結される恋物語である。フランス文学などの伝統となっている姦通というテーマ、そういった西洋的文学の主流からみれば、この作品の世界は非常に特殊である。中世の騎士道的な伝統をひいていると思われるプラトンの愛といわれるものの系譜は、たしかに西洋文学の中に存在している。例えば『ヴェルテル』なども自殺を肯定し美化している。しかしそれらはいずれも、どちらかといえば消極的・敗北的な匂いがただよっている。それに反して、『約束ごと』は、もっと積極的に、美を創造するための完結点としての死という観念に立っている。非常に積極的に、陶酔死という概念を発展させている。そして構成を聖書の比喻に対応させている。このことについては後述する。ローマン主義の作品の多くが死をテーマにしているとはいっても、それはあくまでも *memento mori*（死を忘れるな）としての警告の範囲内のことであつた。不安や恐怖の対象としてであつた、また死の勝利を印象づけるためのものであつた。『赤死病の仮面』などその典型である。しかし、生への執着をもたぬということから出発して、死への親近感というべきものが生じてくるということは、世紀末的現象というべきだろうか。この作品には、死を克服するための輪廻という概念もみられない。宗教を喪失した時代を背景とすれば、死というもっとも未知な神秘への限りない探求精神から、この作品にみられるような死への憧憬あるいはそれへの期待というべき否定的方向を志向するということは、一つの当然の帰結であるといえるかもしれない。ポウの場合、愛する妻に死別したことは大きな誘因になってこのことが彼の作品の内的世界を決定したようにいわれているが、かならずしもそうとはいえない。妻ヴァージニアの死は、ポウ自身の死の2年前、彼38才のとき、1846年のことである。『約束ごと』が ‘Southern Literary Messenger’ にはじめて発表されたのは、1835年、ポウ26才の時である。母親への思慕がダブル・イメージとして底流にあるかもしれない。天性の傾向に負うのかもしれない。しかしこれまで個人的要因が強張されすぎてきたように思われる。ポウは歴史感覚が鋭く先見の明がある。ときには想像力が先ばってしまうことがあるが、Poeの時代背景から影響を受ける外的

E・A・ポウの『約束ごと』の世界

要因もまた、同様に強張されねばならないだろう。科学主義とローマン主義という二つの極が併存した時代であって、ポウの作品はその矛盾に苦悩している。

前述の死のテーマにもどる。愛する人と死によって引き裂かれるというどうしようもない空隙は、死を突破することによってしか埋められることができない。死後の世界は存在しない、魂は土に返り、無に帰す、と簡単に人間の心情は割り切ることができない。そのような唯物論の非情を拒絶し、不可知の他界においてもなんらかの存続を希求することは、人間のもっとも大きな普遍的願望である。その証拠に、来世を想定しない宗教があったらどうか。キリスト教、仏教はいうまでもなく、中世の錬金術の長い歴史、中国の神仙思想、エジプトの墳墓、サラセンの極楽浄土、これらはすべて人類の不老不死、永生への願望である。死というものが避けることのできないものなら、せめてそれを美化しなければならない。現世のよろこびが束の間のよろこびであるなら、むしろそのようなものは捨ててしまって、永劫の中にみずから身を投じて自由になるということも、魂の一つの尊権と主体性であるかもしれない。キリストの言葉に、「私を信ずるものは、たとえ死んでも生きる」とあるが、これなどは、自己の存続への執念と同時に、愛する者の死を見た者のどうしようもない絶望の中の最後の希望である。「彼岸に着きて、やがて会いなん、愛でにし者と」¹⁾というキリスト教徒の言葉は、どのように希望の薄いものであっても捨て切ることのできない最後の希望である。迷いに等しいこのような希望に執着するなら、どのような神に帰依するのであれ、その信念は宗教の世界に属しているといえるだろう。

『約束ごと』は、聖書の比喻を借りてしていると前述した。このことについて以下指摘したい。しかし、この作品の構成が聖書の比喻によっていることは、作者の宗教がキリスト教的でないということの妨げになることはけっしてないのであるし、たんなる文学上の詩的修辭として聖書のイメージを作者が用いることを妨ぐものではないのである。聖書的比喻を用いるということと、ポウがキリスト教徒的であったかどうかという問題とは、この際なんの関係もないのである。そのことをふまえた上で、作品の構成のこと、そのもととなる聖書の構成のことについて述べたい。そうすると、ポウがこの作品において意味したこと、一つの理想像、一つの楽園の姿が浮び上ってくる。

念のために、この作品の概要を述べた方がよいかもしれない。場所はイタリア、ベニス。時はおそらく夏、真夜中に近いある夜、「私」(narrator)が運河をゴンドラに乗って家路についていたとき、サン・マルコ運河を通して「嘆きの橋」(Bridge of Sighs)の近くまで来たとき、突然一人の女性の鋭い悲鳴を耳にする。たちまち一千ものたいまつが侯爵邸を明るくする。子供が母親の腕からすべって、高い窓から暗い運河の中へ落ちてしまった。男達によって捜索がなされたが、むなしかった。邸の入口の敷石の上にけっして忘れることのできない人の姿が立っていた。それはヴェニス中の憧れである美しいアフロディーテ侯爵夫人であった。陰謀家の老メントーニの若い妻であり、最初にして一人子のあの水に沈んでしまった子供の母親の姿であった。彼女は大理石の彫像のようにじっとそこに立っていた。しかし不思議なことに、彼女の目は暗い水面をみつめているのではなくて、彼女の邸の真向いにある旧共和国の立派な建物である牢獄の窓をじっと見ていた。彼女のすぐ近くにサティルスのような老メントーニがいた。あらゆる努力がむなしかった。すべての人があきらめてしまったように思われた。するとそのとき、外套にくるまった一人の男の影がその旧共和国の高い牢獄の窓から運河に飛びこむのが見られた。一瞬にして、その男は、まだ息をしている子供をつかんで敷石の上に侯爵夫人と並んで立ってい

E・A・ポウの『約束ごと』の世界

る。薄衣をまとっただけでスリッパをはくのも忘れたヴィーナスのようなメントーニ夫人と、今や水で重くなりマントがほどけて足もとに落ちてしまったため、美しい体格をあらわして立っている一人の青年と。子供は他の者が受け取って邸の中へ連れ去ってしまった。青年は一言も話さなかった。しかし夫人はどうして顔を赤らめ胸を動悸させているのだろうか。強くけいれんしたように青年の手をとらえて、夫人は不思議な言葉を口にす。 「私」の聞き違いではないだろうか。夫人は低い声でこんなふうにつぶやいた。

“Thou hast conquered—thou hast conquered—one hour after sunrise—we shall meet—so let it be !”

「あなたはお勝ちになりました。日の出の一時間後に私達は会うことに致しましょう。そうしましょう。」

物語は、ここで一つのクライマックスを終える。騒ぎがおさまって、気がついてみるとその青年と「私」だけが残されている。舟でお送りしようという「私」の申し出が受け入れられて運河を行くとき、二人は知遇であったことがわかる。明朝早く訪ねてほしいと青年が「私」に乞う。早朝「私」は彼を訪れて、彼の豪華な特異な装飾をほどこした私室に案内される。教養と格調の高い会話がかわされる。笑いながら死ぬということはもっとも高貴な死であろう、とその青年がいう。彼は長椅子に身を横たえて、自嘲的に笑って神経をたかぶらせたり、沈みこんだりしている。執事が日の出の一時間後を知らせる。そしてとうとう彼は、「さあ」といって「私」をうながす。「さあ、朝はまだ早いけれど、飲みましょう。」彼は、「酔ってしまった」といって、長椅子に横たわる。そのときメントーニ家の小姓がかけこんできて、「奥様が、奥様が毒を飲んでお亡くなりになりました」と知らせる。呆然として「私」が青年を起こそうとすると、彼の手足は固く冷く、もはやこの世の人ではなかった。これが第二のクライマックスであり、終局である。

以上の物語には二、三の疑問点がある。運河に落ちた子供はほんとうに母親の手からすべり落ちたのだろうか。見知らぬ青年が子供を運河から救い出したとき、メントーニ夫人が青年にささやいた言葉は何を意味するのだろうか。何を征服し、日の出の一時間後に会うというのはどういうことか。このように意味の不明であるというか、意味の伏せられた個所がいくつかある。この作品の冒頭には、モットーとして次のような言葉が置かれている。

Stay for me there ! I will not fail

To meet thee in that hollow vale.

(かしこにてわれを待ちたまえ、あのうつろなる谷にて、かならずや御身と相見ん。)

これは Chichester の司教 Henry King が妻の死に臨んでよんだ言葉としてポウは引用している。これは彼岸での再会を約束した言葉であるから、この意味はすぐ理解できる。Aphrodite Mentoni 夫人と青年が、再会を約束して、たがいに離れた場所で毒薬によって他界したことをいうのであろう。ふつうのいわゆる心中ものといわれるものの場合、恋人たちがたがいに場所を違えて死に臨むなどということはありえない。「ロメオとジュリエット」の場合も偶然の行き違いにすぎない。『約束ごと』におけるような離ればなれの心中の約束は、不可能にひとしい信頼をたがいに要求している。不可能にひとしい約束というのが、この作品のもっとも独自の内的世界であって、この作品の頂点をなしている。この作品においては、頂点は Climax であると同時に、キリスト教的な意味での Culmination (最高点、極致) でもあって、主人公たちのロマンスの終結点である。すでに指摘したよ

うに、もう一つ頂点がある。それは、もしかすると夫人は彼女の最初のそしてただ一人の子供をわざと運河に落したのではないだろうかという疑惑である。もしかすると二人はなにか賭のような約束をしていたのかもしれない。彼女のもっとも大切な宝を犠牲にして。愛情、信頼、勇気など、なにかそういった純粋に精神的な資格のことで。そうでなければ「あなたはお勝ちになりました」という彼女の言葉が意味をもたない。作者は、この点については、そうではないかと推測できる程度の暗示にとどめ、それ以上には触れていない。このなにか賭のような約束が、この作品のもう一つの頂点をなしているのである。二つの約束は、一つは子供の生命を賭けたものであり、もう一つは恋人たちの生命を賭けたものである。高い危険率、理性では不可能に近い確率にもとづく希望、そのような危険をおかして、彼らのもっとも尊い犠牲を捧げようとした神とは、その祭壇とは何か。いうまでもなく、それは、次のような、ロマンスの魂 (Genius of Romance) とポウの名づけるところのものであろう。

Yet I remember—ah! how shall I forget?—the deep midnight, the Bridge of Sighs, the beauty of woman, and the Genius of Romance that stalked up and down the narrow canal.

(しかし覚えているのは—ああ、どうして忘れるはずがあろう—深い真夜中、「ため息の橋」、女の美しさ、狭い運河を忍びやかに上下する「ロマンスの霊」などのこと)

二つの約束について考えてみよう。聖書からの比喻といったが、そのことについて説明しなければならない。いうまでもなく、聖書がもつもっとも大きな意味は救いという概念である。その救いの体系は、二つの約束によって啓示されている。すなわち古い約束と新しい約束、新約聖書と旧約聖書 (the New Testament and the Old Testament) である。Testament とは、誓約とか聖約とか訳されているが、語源的には、witness (証言する、目撃する) や testify (試練によって証しする) などの意である。covenant や last will (契約、遺言) などの意に用いられるのはギリシャ語からの誤訳の結果であるらしい²⁾。恋人たちは、試練によってなにかを証し (testify) しようとしたのである。それは、魂の不死、愛、犠牲、勇気、美などあろう。そして語り手の「私」は、彼らの行為と、ギリシャの神々の彫像のような姿を見、証言 (witness) したのであった。また表題の Assignment の意味は³⁾、①指示、選定、②会見 (特に密会の場所・時刻の) 約束、恋人のあいびきの約束、③ (財産、権利などの) 譲渡、となっている。①②は容易に理解できるとして、③の意もまた、この作品で大きな意味をもっている。聖書では、試練にたえて、天国に入ることを許された者に、天国と至福が譲渡されることになっているからである。

聖書の場合、第一の約束とは、未来において魂の救済者 (Messiah) がつかかわされるであろうという神から人間に与えられた約束である。人々はこの予言を信じて数千年間待ち続けたのであった。やがてイエス・キリストが出現して、この第一の約束が成就された。メントーニ侯爵夫人がただ一人の子供を犠牲にしようとしたことと、神の一人子イエス・キリストの受難とイメージがだぶってはいないだろうか。第一の約束が果されて、旧約の世界が終る。一度運河に落されて失なわれた子供が上げられて再び生命を得たとき、今までとは違った世界がひらかれる。水をくぐるということは、洗礼や新生を象徴する儀式である。恋人たちは奇蹟を行い、試練にたえて、第二の試練を行い至福を獲得するための資格をもつ。キリストが「私は道なり」といったあの第一の関門を通過することができた。そして彼らは、第二の新しい約束をかわす。そして新約聖書の説いてる新しい約束とは、

いうまでもなく、この世の終末の予言である。そのときイエス・キリストが、神とともに、裁く人として救済者として再臨し、天国が有資格者に譲渡されるという約束である。第一の約束が果されてから、すでに二千年が経過しようとしている。人々は、天変地異、厄病、戦乱の起こるたびに、これが約束された終末であろうかと恐れるとともに、天国のまじかであることを期待してきた。ポウは鋭い危機意識や、終末意識の強迫解念に悩まされていた。肉体の死は避けられなくとも、魂の死は避けなければならない。しかしキリスト教徒でないものは、どの神を信じたらよいのであろうか。自己の魂のあるいは愛する人の魂の消滅の不安にたいしては、どの神にすがればよいだろうか。人々が数千年間見えない希望にすがって神の約束を信じたように、不可能と思われるものの中の見えない一筋のくもの糸を信ずるしかない。ところが、キリストが「私は道なり、真理なり。私を信じるのでなければ、神のもとに行くことはできない」⁴⁾という言葉は、キリストを信じるのでなければ神はありえず、不死を望むことはできないと宣言しているのである。それでは懐疑論者は絶望に甘んずるかといえ、それもできない。論理を越えたものを信ずることができない懐疑論者が全く不可能と思われるものの中になお希望をつながなければおれないということは、懐疑的ロマンティストの悲しい矛盾である。それともポウは単純に輪廻的な魂の不滅を信じたにすぎなかったのだろうか。そうではあるまい。不可能を可能と信じるのが信仰の精髓であって未知のもの論理にさからうものを信じるのが宗教の本質である。そのような信仰を完うする者にはじめて宗教の奥義が啓示されるのである。そういった宗教的弁証法の矛盾の中に、はじめて真理の奥義が啓示されるのである。そのため経典の比喩はみな謎にみちている。経典の黙示的性格はそのように解釈されるべきだと思う。『約束ごと』が謎めいた作品であること、意味の伏せられた部分が多いことはすでに述べた。このことについてはくわしく後述する。恋人たちがたがいに他方の死を確認することなしに、ただ他方の死を信じつつみずから死に臨むということは、おそらく信ずるといことがもっとも大きな重みをもつ限界であろうと思われる。これは宗教的信仰に相当する。しかし主人公の青年は、懐疑論者であるから、そのような盲目的行為をあえてしようとする自分を自嘲的に笑う。近代人で信仰をもっていると自負する者は、良心的であればあるほど、信仰にたいする確信とおそらく同程度のそれへの懐疑に悩んでいるといわれる。

“Besides, some things are so completely ludicrous that a man *must* laugh or die. To die laughing must be the most glorious of all glorious deaths !”

(その上、世の中には、あんまり馬鹿げているので、笑うか死ぬかせずにはおれないものもあるんだよ。笑いながら死ぬってことほど、すばらしい死に方はないと思うよ。)

そうやって青年は、自己を分析し懐疑と自嘲に悩みながらも、夢の追求、美の創造、情熱の昇華に生命を賭ける。高貴な魂の悲しい行為である。ロマンティストの死は、彼自身にとっては夢の成就である。死への憧れ、死への志向は、狂信的な自滅作用という危険性の一面とともに、純粹さやもののあわれという美の反面をもつ。来世は存在しないかもしれない、恋人は裏切るかもしれない。やりきれない気持を青年はアルコールの陶酔をかりてしずめようとする。「私」は彼を次のように批評する。

—ill fated mysterious man! —bewildered in the brilliancy of thine own imagination, and fallen in the flames of thine own youth !

(幸うすき謎の人よ。みずからの想像の輝きに心まどい、みずからの青春の焰の中に倒

れし人よ。)

「私」はさらに続けていう。

There are surely other worlds than this—other thoughts than the thoughts of the multitude—other speculations than the speculations of the sophist. Who then shall call thy conduct into question? Who blame thee for thy visionary hours, or denounce those occupations as a wasting away of life, which were but the overflowings of thine everlasting energies?

(たしかにこの世とは違った世界も存在するのだ。衆愚の思想とは異なる思想があり、詭弁家の思索とは別個の思索があるのだ。とすれば、誰が、君の行為に異議をさしはさみ得るだろうか、君が幻想にふけるからといって、誰が君をとがめ、あるいは、君の夢想を人生の浪費なりといって責めるものがあるだろうか。君の夢想こそは君の無尽蔵の精力の氾濫にほかならぬのだから。)

II

『約束ごと』には、The Visionary という副題がつけられている。青年が理想として求めた「価値」あるいは「夢」(vision) とは何かについて、またこの作品が黙示的性格をもっていることについて明らかにしなければならない。この作品の構成がヨハネの黙示録と対比させられていることについて指摘しなければならない。

比較を容易にするために、黙示録の該当する部分を引用すると、

The REVELATION of Saint John the Divine⁵⁾

Chapter 1

(The prologue: the giving of the revelation; the blessing on the reader and hearer. John to the seven churches. John in Patmos: the command to write; the one he saw.)

1. The Revelation of Jesus Christ, which God gave unto him, to show unto his servants things which must shortly come to pass; and he sent and signified it by his angel unto his servant John:

2. Who bare record of the word of God, and of the testimony of Jesus Christ, and of all things that he saw.

3. Blessed is he that readeth, and they that hear the words of this prophecy, and keep those things which are written therein: for the time is at hand.

4. John to the seven churches which are in Asia: Grace be unto you, and peace, from him which is, and which was, and which is to come; and from the seven Spirits which are before his throne;

5. And from Jesus Christ, who is the faithful witness, and the first begotten of the dead, and the prince of the kings of the earth. Unto him that loved us, and washed us from our sins in his own blood,

6. And hath made us kings and priests unto God and his Father; to him be glory and dominion for ever and ever. Amen.

7. Behold, he cometh with clouds; and every eye shall see him, and they also which pierced him: and all kindreds of the earth shall wail because of him. Even

so, Amen.

8. I am Alpha and Omega, the beginning and the ending, saith the Lord, which is, and which was, and which is to come, the Almighty.

9. I John, who also am your brother, and companion in tribulation, and in the kingdom and patience of Jesus Christ, was in the isle that is called Patmos, for the word of God, and for the testimony of Jesus Christ.

10. I was in the Spirit on the Lord's day, and heard behind me a great voice, as of a trumpet,

11. Saying, I am Alpha and Omega, the first and the last : and, what thou seest, write in a book, and send it unto the seven churches which are in Asia ; unto Ephesus, and unto Smyrna, and unto Pergamos, and unto Thyatira, and unto Särdis, and unto Philadelphia, and unto Laodicea.

12. And I turned to see the voice that spake with me. And being turned, I saw seven golden candlesticks ;

13. And in the midst of the seven candlesticks one like unto the Son of man, clothed with a garmeent down to the foot, and girt about the paps with a golden girdle.

14. His head and his hairs were white like wool, as white as snow; and his eyes were as a flame of fire ;

15. And his feet like unto fine brass, as if they burned in a furnace ; and his voice as the sound of many waters,

16. And he had in his right hand seven stars : and out of his mouth went a sharp two-edged sword : and his countenance was as the sun shineth in his strength,

17. And when I saw him, I fell at his feet as dead. And he laid his right hand upon me, saying unto me, Fear not ; I am the first and the last :

18. I am he that liveth, and was dead ; and, behold, I am alive for evermore, Amen ; and have the keys of hell and of death,

19. Write the things which thou hast seen, and the things which are, and the things which shall be hereafter :

20. The mystery of the seven stars which thou sawest in my right hand, and the seven golden candlesticks. The seven stars are the angels of the seven churches : and the seven candlesticks which thou sawest are the seven churches,

ヨハネの黙示録 1⁶⁾

1. イエス・キリストの黙示。これは、すぐに起こるはずのことをそのしもべたちに示すため、神がキリストにお与えになったものである。そしてキリストは、その御使いを遣わして、これをしもべヨハネにお告げになった。

2. ヨハネは、神の言葉とイエス・キリストの証し、すなわち、彼の見たことのすべての事を証した。

3. この預言の言葉を朗読するものと、それを聞いて、そこに書かれていることを心に留める人々は幸いである。時が近づいているからである。

E・A・ボウの『約束ごと』の世界

4. ヨハネから、アジアにある七つの教会へ。常にいまし、昔いまし、後にこられる方から、また、その御座の前におられる七つの御霊から、
5. また、忠実な証人、死者の中から最初によみがえられた方、地上の王たちの支配者であるイエス・キリストから、恵みと平安があなた方にあるように。イエス・キリストは私たちを愛して、その血によって私たちを罪から解き放ち、
6. また、私たちを王とし、ご自分の父である神のために祭司として下さった方である。キリストに栄光と力があるように。アーメン。
7. 見よ、彼が雲に乗って来られる。すべての目、ことに彼を突き刺した者たちが、彼を見る。地上の諸族はみな、彼のゆえに嘆く。しかり。アーメン。
8. 神である主、常にいまし、昔いまし、後に来られる方、万物の支配者がこう言われる。「私はアルファであり、オメガである。」
9. 私、ヨハネはあなたがたの兄弟であり、あなたがたとともにイエスにある苦難と御国と忍耐とにあずかっている者であって、神の言葉とあかしとのゆえに、パトモスという島にいた。
10. 私は主の日に御霊に感じ、私のうしろにラッパの音のような大きな声を聞いた。
11. その声はこう言った。「あなたの見ることを巻き物にしるして、七つの教会、すなわち、エペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、フィラデルフィア、ラオデキアに送りなさい。」
12. そこで私は、私に語りかける声を見ようとして振り向いた。振り向くと、七つの金の燭台が見えた。
13. それらの燭台の真中には、足までたれた衣を着て、胸に金の帯を締めた、人の子のような方が見えた。
14. その頭と髪の毛は、白い羊毛のように、また雪のように白く、その目は燃える炎のようであった。
15. その足は、炉で精練されて光り輝く真鍮のようであり、その声は大水の音のようであった。
16. また、右手に七つの星を持ち、口からは鋭い両刃の剣が出ており、顔は強く照り輝く太陽のようであった。
17. それで私は、この方を見たとき、その足もとに倒れて死者のようになった。しかし、彼は右手を私の上に置いてこう云われた。「恐れるな。わたしは、最初であり、最後であり。
18. 生きている者である。わたしは死んだが、見よ、いつまでも生きている。また死とハデスとの鍵を持っている。
19. そこで、あなたの見た事、今ある事、この後に起こる事を書きしるせ。
20. わたしの右の手に見えた七つの星と、七つの金の燭台について、その秘められた意味を言えば、七つの星は七つの教会の御使いたち、七つの燭台は七つの教会である。

一読して、構成の類似はあきらかで、ほとんど説明の必要がない。「私ヨハネは神の言葉とあかしとのゆえに、パトモスという島にいた」（9節）は、『約束ごと』の場所がベニスの二大島の一つ、San Marko 島であることと対応している。「私は主の日に御霊に感じ、私のうしろにラッパの音のような大きな音を聞いた」（10節）と「その声は大水の音

のようであった」(15節)は、「私」が瞑想にふけりながら、憂鬱な夜、ゴンドラに乗って運河をたどっていたとき、突然女の鋭い叫び声がした」に対応している。「振っむくとそれらの燭台の真中には、足までたれた衣を着て……」(12, 13節)は、「窓から千ものたいまつが輝き出し、美しいアフロデーテ侯爵夫人の姿が立っていた」に対応し、「その頭と髪の毛は…」、「その目は…」。「その足は…」(13～15節)はすべて、それに対応する彼女の姿が描写されている。

Upon the broad black marble flagstones at the entrance of the palace, and a few steps above water, stood a figure which none who then saw can have ever since forgotten. It was the Marchesa Aphrodite—the adoration of all Venice—the gayest—the most lovely where all were beautiful—

(邸宅の玄関の黒大理石の広い敷石の上、水面から階段を数歩上ったあたりに、一人の人影がたたずんでいたが、その夜、この姿を見た者は忘れることはできないだろう。それはアフロディテ侯爵夫人だった。ヴェニス中の敬愛の的、華やかな中にもさらに華やかな人、美女の中の美女だった。)

She stood alone. Her small, bare, and silvery feet gleamed in the black mirror of marble beneath her. Her hair, not as yet more than half loosened for the night from its ball-room array, clustered, amid a shower of diamonds, round and round her classical head, in curls like those of the young hyacinth. A snowy white and gauze-like drapery seemed to be nearly the sole covering to her delicate form; but the mid-summer and midnight air was hot, sullen, and still, and no motion in the statue-like form itself, stirred even the folds of that raiment of very vapor which hung around it as the heavy marble hangs around the Niobe.

(彼女はただ一人で立っていた。銀色に輝く小さなあらわな足は、足許の大理石の黒い鏡に映って、おぼろな光を放っていた。髪は舞踏会のよそおいを、寝仕度のためにやっとなかばときほぐしただけで、古典的な顔のまわりに、無数のダイヤモンドに飾られ、ヒヤシンスのつぼみのような巻毛となって、ふさふさと垂れかかっていた。美しい体をおおっているものは、雪のように白いうすぎぬのような掛布だけのようだった。真夏の真夜中の空気は熱っぽく、憂愁をたたえて静まりかえり、彫像のような彼女の姿もじっと動かず、ナイオビのまとう重い大理石の衣のように体のまわりにたれているあの夜霧のように薄い衣のひだを動かすことさえしなかった。)

活人画のような彼女は、しかし、不思議な動作をしている。

Yet—strange to say!—her large lustrous eyes were not turned downwards upon that grave wherein her brightest hope lay buried—but riveted in a widely different direction!

(しかし、一不思議なことに一その大きな輝く目は、彼女の最大の望みであるわが子の葬られている墓にむけられているのではなく一全く別な方向に釘づけにされていた。) いうまでもなく彼女のまなざしは青年の現われる方向にむけられているのであるが、彼女の彫像のような姿はいつも不思議な謎めいた動作をしている。上記引用のような彼女の印象的な姿は、少しずつ姿態を変えながら、何度も現われて、それらはいずれも秘蹟的な意味を黙示している。はじめは石像のようであった彼女の姿は、青年が現われたとき、次のように、生命の通ったものとなる。

And the Marchesa ! Her lip—her beautiful lip trembles : tears are gathering in her eyes—those eyes which are soft and almost liquid. Yes ! tears are gathering in those eyes—and see ! the entire woman thrills throughout the soul, and the statue has started into life ! The pallor of the marble countenance, the swelling of the marble bosom, the very purity of the marble feet, we behold suddenly flushed over with a tide of ungovernable crimson ; and a slight shudder quivers about her delicate frame, as a gentle air at Napoli about the rich silver lilies in the grass. Why should that lady blush !

(そして侯爵夫人は！ その唇は、美しい唇はふるえ、その眼には—やわらかくうるんだその眼には涙があふれている。そうだ！ 涙があふれている。そして見よ！ 夫人の身も心もうちふるえ、彫像に生命が通いはじめた。大理石のような青白い顔、大理石のような胸のふくらみ、大理石のようなきよらかな足が、突然、潮のように押しとどめようのない朱の色に染まるのが見えた。そしてナポリの微風が草原の鮮かな銀色の百合をふるわせるように、かすかなおののきが彼女の優美な体をよぎる。なぜ夫人は顔を赤らめるのだろうか。)

第一・第二の姿とも黙示録(13～15節)をまねて、「その目」、「その足」、「その顔」が描写されている。本文の「そして見よ」(斜体字)も黙示(7, 17節)を模している。「右手に七つの星を持ち」(16節)と「しかし彼は右手を私の上に置いてこう云った。」(17節)とは矛盾していて、同時に起りえない。ポウはこれをどのように処理しているかという時間的にへだてさせている。「右手を置いてこう云った。」は、いうまでもなく、夫人のわななく手が、青年の手に触れて、あなたは征服ないました云々といったことと対応している。その言葉の意味はすでに前述した。「右手」(16, 17節)に関しては、作品中では次のとおりである。青年の部屋を訪れた「私」と彼は、室内にある絵画について語り合う。「あなたはこの絵、嘆きの聖母(Madonna della Pietà)をどう思う？」と青年、「ほんもののゴドー(Guido)の作じゃありませんか。絵画の世界におけるこの聖母像の位置は、まさに彫刻の世界では、ヴィーナス像にあたるものですね」と私。

“Ha !” said he thoughtfully, “the Venus—the beautiful Venus ?—the Venus of the Medici ?—she of the diminutive head and the gilded hair ? Part of the left arm (here his voice dropped so as to be heard with difficulty), and all the right arm are restorations, and in the coquetry of the right arm lies, I think, the quintessence of all affectation.”

(「え！」彼は考えこみながら言った。「ヴィーナス？—美しきヴィーナス—メディチのヴィーナスかい？—頭の小さい、髪を金色に塗ったのかい？ 左腕の一部と(ここで彼の声は聞きとりにくいほど低くなった)それから右腕は全部修復されたものなのだ。それとあの右腕はきざのきわみだと私は思うね。)

頭、髪、右腕がここでもまた強張されている。どこにポイントがあるのか、秘密の意味がどこにかくされているのかが、ここでもまた暗示されている。左腕について彼の云った言葉は聞きとれなかったとあるのは、黙示録では左腕についてはなにも言及していないため、読者に黙示録との比較を思いつかせるため、ことさら書き入れたポウの技巧であると思われる。いうまでもなく黙示録の精神は黙示であるから、この作品の意味も黙示であることに気づけば解釈できるということをポウはこのような陰喩的表現によって黙示してい

るのである。さらに青年はもう一枚の絵をとり出してくる。「まだあなたに見せていない絵があるのだが」といって、壁の掛布をさっと引きあげて彼が示したのは、侯爵夫人アフロディテの等身大の肖像だった。

Human art could have done no more in the delineation of her superhuman beauty. The same ethereal figure which stood before me the preceding night upon the steps of the Ducal Palace, stood before me once again. But in the expression of the countenance, which was beaming all over with smiles, there still lurked (inconprehensible anomaly!) that fitful stain of melancholy which will ever be found inseparable from the perfection of the beautiful.

(およそ人間のたくみが、夫人の絶世の美をこれ以上完璧に描き出すことは不可能だったろう。昨夜私の前に公爵邸の石段の上に立ったこの世のものとは思われぬあの同じ優姿が、ふたたび私の前に立っていた。しかし微笑で輝きあふれるその顔の表情には(不思議な変則だが)完璧な美には避けがたいあの気まぐれな憂愁の影がなおもひそんでいた。)

以上「私」がたびたび目撃した夫人の姿は、今、目の前の画布の上にその完璧の美を再現されていた。「私」は思わず次の章句を口にする。

“He is up

There like a Roman statue! He will stand
Till Death hath made him marble!”

(かの人、かしこにて、ローマの彫像のごとく立てり、死がかの人を大理石にかえるまで!)

これは黙示録(14, 16節)のキリストの姿とパラレルをなしている。寓意画・謎絵としての意味もここで完成される。

Her *right arm* lay folded over her bosom. With *her left* she pointed downward to a curiously fashioned vase. One small fairly *foot*, alone visible, barely touched the earth—and, scarcely discernible in the brilliant atmosphere which seemed to encircle and enshrine her loveliness, floated a pair of the most delicately imagined wings.

(彼女の右腕は胸の上で曲げられ、左腕は下方の妙な形をした壺を指していた。片方だけ見えている、小さな美しい足は、かろうじて大地に触れていた。彼女の美しい姿をうやうやしく納め、包んでいる明るい大気のなかに、霊妙な一對の想像の翼がかすかに浮んでいた。)

さきほど青年が、聖母像の左腕について聞きとれぬ声でなにか云ったとあったが、やはりこれが最後の鍵であったのだ。今、夫人の左腕が指さしている壺には、おそらく毒薬が入っていると想像できる。やはり夫人と青年は、以前から賭の約束をかわしていたのだ。今やすべての謎があきらかにされる。夫人の着けている想像の翼は、死を越えて、恋人たちがロマンスの園へ飛翔することを暗示していたのだ。「夢見ることが、私の生涯の仕事だったのだ」と言う青年の言葉は、作者ポウのそれでもあったろう。ここで思いうかばずにおれないのは、1831年ポウ25才のときはじめて出版された‘To Helen’である。ポウ14才のときの作ともいわれているこの詩と、死の2年前に書かれた『約束ごと』のメントーニは、同じものであって、ポウの生涯を通じて、ギリシャ的理想の女性像であったといえる夫人像だろう。

以上のように、黙示録との構成の類似はあきらかである。語り手の「私」は、予言者ヨハネの働きをして、天啓によって命ぜられたこと、このばあいは美の理想像、を書きしるしている(19節)。ヨハネが証言したキリストの姿(13~16節)になぞらえて、「私」は、永遠の女性像を証言した(1~3, 19節)。右の手の指したものとその秘められた意味も理解された(20節)。「恐れるな。わたしは、最初であり、最後であり、生きている者である。わたしは死んだが、見よ、いつまでも生きている。また死と黄泉との鍵を持っている」(17, 18節)というキリストの言葉が重複されて、この作品であらわす意味も理解された。「この預言の言葉を朗読するものと、それを聞いて、そこに書かれていることを心に留める人々は幸いである」(3節)によってポウが意図しているところのものもあきらかである。黙示録のこのキリストのイメージは、『ゴードン・ピム』などにおけるように、ポウの作品中にしばしばみいだされる。

アフロディーテ夫人の肖像画であるヴィーナス寓意画は、黙示録のキリスト像から延長、敷衍されて、彼女の指さす poison は、キリスト教徒の秘蹟である blood にあたるものであるだろう。彼女が導く愛と美の聖所へ至るための触媒的働きを poison がしている。その聖所とは、また、'To One in Poradice' にうたわれている地上的・天上的至福の楽園である。その楽園に入るためには、生命を捨てなければならない。生命を捨てることによって永生を得るというのは、また、キリスト教的逆説をふまえている。煩惱の消滅(the extinction of passion)によって涅槃に入る、とする仏教的浄土思想とも共通した要素である。

〔注〕

- 1) 讚美歌
- 2) 研究社新英和大辞典
- 3) 同上
- 4) *St. John* 14:6
- 5) *The Authorized Version of the Bible*
- 6) 文語訳聖書

テキストは *The Complete Works of EDGAR ALLAN POE* ed. by James A. Harrison (AMS Press Inc., New York, 1965 Reproduced from 1902 New York Edition